

## ドクターメール



泌尿器科部長  
和久本 芳彰

## 前立腺がん その非常識のような常識

一般に極めてゆっくり育つものが多く、がんとして発症する前にその方の寿命が他の原因で尽きてしまう、ということが少なくないのです。となると、“そのまま様子を見ていても人生に影響がないなら、無理に治療を仕掛けなくてもよい”ということになります。これが Insignificant cancer の考え方です。

早期発見はがんを克服する上で大切ですが、治療によって生ずる合併症等がその後の人生に負の影響を及ぼす可能性も考えなければなりません。生命に悪影響がないならば、積極的な治療が過剰医療となってしまうこともあり得ます。早期発見＝直ちに治療が常に正しいとは限らないのです。



### 発見されやすくなった 前立腺がん

前立腺がんは近年劇的に増え続けています。なぜこれほど増えているのか。もともと前立腺がんは高齢の方に多いことに加え、PSA というがんマーカーの存在が挙げられます。精度・信頼度とも非常に高く、がんの存在をいち早く捉えます。

この PSA により、前立腺がんは早期診断早期治療が可能となり、多くの方がその恩恵を受けています。ただし、ここで知っておいてほしいことがあります。



### 潜伏がん

前立腺がんは発症しないまま潜伏しているものが多く、年齢とともにその比率は高くなります。70 歳代では 40%、80 歳代では 50%の方の前立腺にがんが潜んでいるとする報告もあります。つまり、長生きすればするほど前立腺がんになるとも言えます。そこでさらにひとつ。



### 早期発見 = 直ちに治療??

それは Insignificant cancer という概念、“臨床的に意義のないがん”と訳されます。“がん”なのに意義がない、というのは奇妙な言い方ですが、前立腺がんは



### 監視療法という選択

ただし、治療すべきか待つべきかを定める明確な基準はありません。この対応策として監視療法があります。診断後直ちに治療を開始するのではなく、定期的に PSA 検査等を行い、経過観察しつつ治療開始のタイミングを見極める方法です。患者にはがんと共存していく不安が残りますが、治療による QOL (生活の質) の犠牲を避けられるのは大きな特典でもあります。

もし前立腺がんと診断されたら、監視療法を視野に主治医ともよく相談の上、自分にとって最良の治療法を選択してください。

〔参考〕 日本泌尿器科学会編、前立腺がん診療ガイドライン  
国立がん研究センター がん情報サービス





# 心臓血管外科部長として赴任した 古川博史先生を紹介します



心臓血管外科部長  
古川 博史

2023年6月に心臓血管外科部長として赴任いたしました。約30年にわたり、心臓血管外科医として様々な心臓血管疾患の治療を行ってきました。今まで虚血性心疾患や弁膜症、大動脈瘤、大動脈解離など心臓大血管手術だけでなく、下肢血行再建術や複雑な透析用バスキュラーアクセス手術も多数手がけてきました。

近年の高齢化社会の急速な進行により、高齢者に対する心臓血管疾患の治療が増加傾向にありさらに併存疾患を多く有する患者の重症化も顕著です。外科的治療だけでなく、カテーテル治療などを含めた患者にやさしい治療を導入し、さらに術後の早期ADL獲得とQOL維持に向けた心臓リハビリテーションにも指導士として力を入れています。

心臓血管外科医だけでなく、多職種の介入したチーム医療が必須となり、新しい心臓血管外科チームによって24時間365日対応可能な地域に貢献・信頼できる診療科を目指します。心臓血管病変の外科的治療だけでなく、治療内容やケアなど、どんなことでもお気軽にご相談いただければ、フットワーク良く対応させていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

## ■「看護の日イベント」を開催しました

5月12日は近代看護の基礎を築いたフローレンス・ナイチンゲールの誕生日です。約3年ぶりに「看護の日」を開催しました。コロナ感染症の規制が緩和されてすぐのため、規模も縮小して2時間程度の開催となりました。当日は延べ97名の方に参加をいただきました。

今年は初めて認知症相談のブースを開催し「やっとこんなふうに看護師さんと話が出来て良かった。」という言葉いただき、胸が熱くなりました。またホームページを見て足を運んで下さった方もいっしょに、皆さんのお役に立てたと感じる事が出来ました。

来年はさらに工夫をこらし多くの皆様とお会いできる日を楽しみに、準備を進めて参ります。



看護師さんの指導で  
AEDを体験しました！

病院の救急車の中を  
実際に乗って見学！

## ■「第22回 東京臨海病院 区民公開講演会」を開催しました

5月20日(土)「脳をまもる私たちの取り組み～脳卒中チーム医療の最前線～」をテーマに講演会を開催しました。

前回に引き続き、会場のタワーホール船堀とWEB配信を併用したハイブリッド型式で行われ、江戸川区民の方を中心に多数の方にお集まりいただきました。

次回の講演会は、  
10月21日(土)開催予定です。  
詳細はあらためて  
お知らせいたします。



前脳卒中センター副センター長  
栗本 健太郎



集中治療室看護師長  
古杉 優

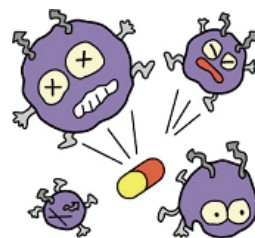


脳卒中センター長 / 脳神経外科医長  
藤井 本晴

# 抗ウイルス薬について

## ●「ウイルス」

ウイルスは細菌よりもさらに小さく、自分で細胞を持っていないため、ほかの生物の細胞の中に入り込んで生きていきます。人の体内にウイルスが侵入すると、細胞の中に入り込み、自分のコピーを作り、コピーされた大量のウイルスは細胞から飛び出し、さらに他の細胞に入り込みウイルスは増殖していきます。



## ●「抗ウイルス薬」

抗ウイルス薬は、ウイルスが細胞に侵入したり、増殖・拡散する過程の一部を阻止することで効果を発揮し、ウイルスが体内で増えるのを抑える効果があります。しかし、使用できる抗ウイルス薬は、限られた感染症のみにしか適応されません。ウイルスはとても小さいうえ、構造も非常にシンプルなこともあり、薬の標的にしづらいことや、人の細胞に侵入して増殖するため、人体に影響を与えずにウイルスだけに作用する薬を作るのが難しいことなどが主な理由です。

## ●「新型コロナウイルス感染症に対する抗ウイルス薬」

新型コロナウイルス感染症に罹患すると、高齢者や基礎疾患のある一部の方では、肺炎を起こし、酸素投与が必要になるなど重症化することがあります。また、基礎疾患のない若年者などでも、感染症の療養が終わった後、何らかの症状が長引いたり（3ヵ月～1年以上）、新たな症状が現れたりするなどのいわゆる後遺症が出る場合があります。このような重症化や後遺症を予防するには、感染早期に体内のウイルス量を下げることが有効であると報告されています。現在4種類の抗ウイルス薬が新型コロナウイルス感染症に使用できます。症状や基礎疾患などにより、患者さん毎に適した治療が異なりますので、身近な医療機関にご相談ください。

## NEW FACE

2023年5・6・7月に着任した医師を紹介します。

心臓血管外科	部長	古川 博史 (フルカワ ヒロシ)	整形外科	医員	久木原 由華 (クキハラ ユカ)
小児科	医員	関口 玲子 (セキグチ レイコ)	整形外科	医員	宮沢 隼弥 (ミヤザワ シュンヤ)



## ■ 診療科名の変更

「糖尿病内科」は6月20日より、「内分泌代謝・糖尿病内科」に科名変更しました。

## ■ 新型コロナウイルス感染症に関するお知らせについて

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため面会禁止としておりましたが、7月1日より面会制限を緩和しました。今後の状況の進展により対応の変更が生じると考えられます。来院の際は、ホームページにて最新情報をご確認くださいようお願いいたします。

★詳しくは病院ホームページをご覧ください <http://www.tokyorinkai.jp/>

## ■ 休診のお知らせについて

当院ホームページにて、休診のお知らせを掲載しております。ご予約以外で受診される際ご確認をお願いいたします。

新型コロナウイルス感染症の対応により外来診療スケジュールが急遽変更になる場合があります。

また、医師の急な都合により、休診情報を掲載できない場合がございますので、

あらかじめご了承ください。

## ■ 「東京臨海病院公式 Facebook」

東京臨海病院では Facebook ページで、病院の院内・院外活動について情報発信を行っています。



病院ホームページ



Facebook

【8・9・10月の土曜診療日】

8月12・26日、9月9日、10月14・28日

■受付時間■午前8時～午前10時30分 原則として予約診療はいたしません。  
※9月23日は、祝日のため休診です。



# お薬手帳

## ご存じですか？「薬薬連携」

### 「連携」とは？

ここ数年、医療の現場では「連携」の重要性が高まっています。医療連携、地域連携、他職種連携、薬薬連携など、聞き慣れない言葉だと思いますが、誰と誰が連携するかによって様々な「連携」が存在します。

### 「連携」が重要な理由

高齢化社会を迎え、病気や治療法だけでなく患者さんが抱える問題も様々です。そのため、地域の医療機関同士で役割分担を行い、患者さんにとって最適な医療機関へ案内する仕組みが増えてきています。そこで重要なのが「連携」です。病院間だけでなく在宅医療を担う診療所や介護施設、そして調剤薬局が「連携」し、地域で患者さんを支えていく体制が少しずつ整えられています。

### 「薬薬連携」一丸となって薬物治療をサポート

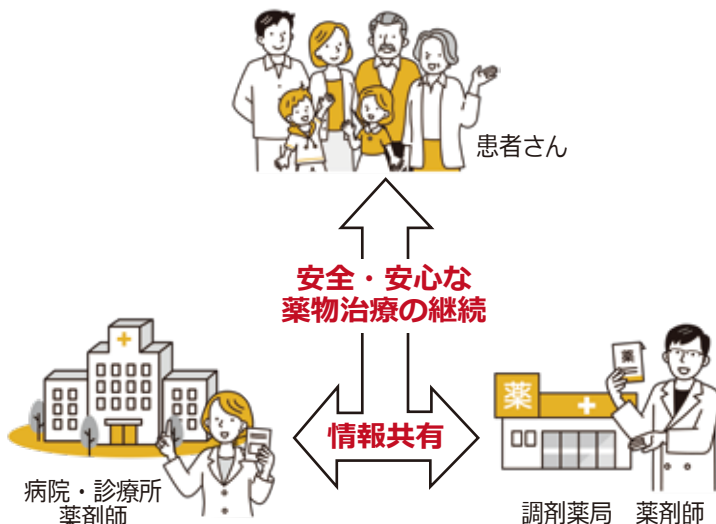
調剤薬局の薬剤師と病院の薬剤師が連携して、患者さんの薬物治療を支援することを「薬薬連携」と言います。安全・安心な薬物治療を継続して受けることができるよう、お薬手帳や情報提供書などを用いて患者さんの情報を共有します。

新しくもらった薬がどうも合っていない気がする、次の診察まで薬がたくさん余っているなど、お薬のことは薬剤師に相談して下さい。これらの情報は薬局から病院へ伝わり、病院薬剤師と医師が連携して処方適正化を図ります。

### 「薬薬連携」 当院の取り組み

当院では、外来通院でがん治療を行っている患者さんに対して同意を得た後に、かかりつけの調剤薬局へ治療内容の情報提供を行っています。薬局の薬剤師が治療内容を把握することで薬の飲み忘れや副作用の確認をすることができます。いち早く患者さんの状態を知ることによって安全に治療を進められますし、お薬の相談もしやすくなると思います。もし何か問題があれば、薬局薬剤師から病院薬剤師に情報がフィードバックされ、主治医へ伝わり次の診察に反映されます。

ぜひ、便利で信頼できる薬局をみつけて、安全安心なサポートを受けられるこの連携の輪に加わりましょう。



## 処方せんはお早めに!!

処方せんの有効期限は発行日を含めて

# 4日間です



### 注意点

- ◆既に期限が切れた処方せんに対して、**薬局で「期限延長」の対応はできません**
- ◆処方せんの再発行にかかる費用には、**保険を使えません**（全額自己負担）

お早めに  
調剤薬局へお持ちください

発行日	2日目	3日目	4日目	5日目
土	日	月・祝	火	水
有効期限：4日間				無効
休日や祝日が含まれます				

※特別な事情がある場合は、事前に期限の延長を医師に相談する  
(保険医療機関及び保険医療費担当規則 第20条第3号イ)

### 編集後記

2020年から始まった新型コロナ肺炎のパンデミックがようやく終息に向かい始め、平時の日常生活が戻りつつあります。ほっと一息と言いたいところですが、世界に目を向ければ過去に前例のない金融危機、そしてウクライナとロシアを象徴とした戦争の拡大。平和な時代が終わりを告げ、激動の時代に突入するようです。私たちは過去の過ちを再び繰り返してしまうのでしょうか。人類の叡智を信じてやまないこの頃です。



### 診療実績

2023年6月の当院の実績は以下のとおりです。

病床数：400床  
 医師数（2023年6月1日現在）：76名  
 外来延患者数：15,160名  
 入院延患者数：7,533名  
 手術件数：250件